

「キャリア教育」問題と子どもの社会化

ーコンストラクティヴィスト・アプローチー

瀬戸 知也

On Career Education Problem and Socialization of Children : A Constructivist Approach

Tomoya SETO

1. 「キャリア教育」問題を考える視角について

Patton(2005) は、産業社会からポスト産業社会への移行にともない、「キャリア教育」のあり方も変化する必要があるとして、「特性要因にもとづくキャリア選択の指導」に代表されるようなこれまでの「キャリア教育」と対比する形で、コンストラクティヴィスト・アプローチの立場に立った「キャリア教育」の考え方について、次のとおり論じている (表 - 1 参照)。

表 1 : (Patton, 2005: p.26.より作成。)

	これまでのキャリア教育 (特性要因によるキャリア選択、産業社会における教育観)	コンストラクティヴィスト・アプローチによるキャリア教育
教師観	教授指導実践家としての教師	キャリア発達のファシリテーター、アドバイザー、ガイド、メンターとしての教師
学習内容	情報提供	学習過程を用いた知識の構築
学習者の役割	受動的な受取人	能動的な参加者、学習の構築者
学習目標	あらかじめ設定されている。	学習者によって決定されるゴールや結果との関連から生みだされるもの 学習者のニーズが中心。

これまでの「キャリア教育」においては、「教授指導実践家としての教師」観に立ち、学習内容としては「情報提供」を中心にして、学習者の役割は「受動的な受取人」であり、学習目標は「あらかじめ設定されている」のに対して、コンストラクティヴィスト・アプローチによる「キャリア教育」では、「キャリア発達のファシリテーターやアドバイザー、ガイド、メンターとしての教師」観に立ち、学習内容は「学習過程を用いた知識の構築」を中心として、学

習者の役割は「能動的な参加者、学習の構築者」とされ、学習目標も「学習者によって決定されるゴールや結果との関連から生みだされるもの」であり、「学習者のニーズ」が中心となるものであると説明している。また、コンストラクティヴィスト・アプローチによる「キャリア教育」の特徴は、過去と現在をつなぎ、未来のプランをうみだす主体的な「キャリア・ナラティヴ」を構築する機会を提供するところにあると指摘している。

Bujold(2004)もまた、コンストラクティヴィズムの立場から「ナラティヴとしてのキャリア」に関する諸議論を整理する論文において、たとえば「雇用(employment)」の問題を「伝統的な特性要因モデルによるキャリア選択」の問題ではなく、「どのようにして人々は、意味があり、生産的で、実現可能なキャリア・ナラティヴにおける主要登場人物としてキャストされるのか」という問題としてとらえ直す議論を再検討する中から、「キャリア」問題に対するコンストラクティヴィスト・アプローチの特徴が、「人々が、それぞれのライフストーリーにおける『受動者(patients)』から『動作主(agents)』へと変わること」や「人々が自身の人生のエキスパートであるという考え方」にもとづき、「キャリア選択の奥底にある動機付けの問題に光を当てることができる」ところにメリットがあると指摘している。

2. 「キャリア・ナラティヴ」の構築という問題

要するに、コンストラクティヴィスト・アプローチの立場からすれば、「キャリア形成」の問題は、「キャリア・ナラティヴ」の構築の問題としてとらえ直すことができるものである。

たとえばキャリア・カウンセリングの実践についてみても、「キャリア・ナラティヴ」の観点からは、以下のとおりにとらえ直すことができる。

Gibson(2004)によれば、ナラティヴを通じたキャリア・カウンセリングにおいては、「カテゴリーや役割、職業の観点ではなく、意味(meaning)の観点から自己を理解すること」を基盤として、「探知(detection)のプロットではなく、探求(quest)のプロット」としての「キャリア・ナラティヴ」の構築としてのキャリア・カウンセリングの実践を位置づけることができる。

事例の検討を通じてGibson(2004)は、キャリア・カウンセリングへのナラティヴ・アプローチは、「クライアントに自分のアイデンティティやキャリアの著者(author)となるように勧誘し支援する」ものであり、「著者という反省的ポジションからクライアントは、意味あるストーリーを生きる責任を認識し行為すること」が可能になると述べている。「著者性(authorship)」には、「人々の人生やキャリアにおける登場人物として自身が動機づけられる」という面だけではなく、「その動機から距離を置き、評価する」という面や「人々が誰になりつつあるのか、そして誰になりたいのか、を問う」という面が含まれる。キー・ポイントは、「クライアントのストーリーがより厳密な意味で自分自身のものになること」、つまり「キャリアの無境界性が結果する非連続性や断片化に代えて、クライアントがより一貫したパーソナルな職場の意味を開発することができる能力(capacity)を認識すること」にあるとしている。

3. 「キャリア・ナラティヴ」と子どもの社会化

では、「キャリア・ナラティヴ」の獲得の問題と子どもの社会化過程との関連については、どのように考えることができるであろうか。

「社会化」の概念については、たとえば『新教育社会学辞典』では、「個人がその所属する

社会や集団のメンバーとなっていく過程」として教育社会学の分野において使用されることが多いと説明されている(高橋, 1986)。私は、この概念をめぐる考察において、「いわゆる『社会化』の過程をとらえる視点は、先ずは『社会化する』側の視点を前提としたナラティブ(物語)として存在するものであり、その点からは、『社会化される』側の視点は、あくまでも従属的な位置にとどまらざるを得ないことをここでは指摘した。さらに続けて、最後のところで『ある社会のドミナント[支配的]なストーリーを聴く/語る共同体の一員になるという意味での社会化の視点』を指摘したのは、『社会化』が一つのナラティブ(物語)であり、その物語は『ドミナント・ストーリー』として人々に対する支配的なストーリーとして存在する一方で、その中で問題を抱えた子ども=社会化される側は、『ナラティブ・セラピー』が言うところの、『オルタナティブ・ストーリー』の生成の可能性をもつことを示唆するためであった。つまり『社会化』過程には、いわゆる大人たちが管理し運営するナラティブの側面と、子どもたち自身が自己定義し自己執行するナラティブの側面という、少なくとも二つの側面があるということである。」と指摘した(瀬戸, 2005a)。

そして、前述のようなコンストラクティヴィスト・アプローチによる「キャリア教育」の考え方に立つとすれば、子どもの社会化過程において子ども自身が構築する「キャリア・ナラティブ」の意味がより重要になってくるであろうし、子ども自身にとってより意味のある「キャリア・ナラティブ」の生成の可能性としての「オルタナティブ・ストーリー」の生成と展開の過程に関する考察がより重要になってくるものと考えられる。

また一方で、社会化のツールとしてのナラティブ・プラクティスやナラティブの社会化力に注目するMiller(1994)は、子どもの自己構築(self-construction)に関わるストーリーの語られ方を次の3種類に分けてとらえる見方を提示している。(1)子どもの周囲で語られる物語り(telling stories around the child)、(2)子どもに関して語られる物語り(telling stories about the child)、(3)子どもと共に語る物語り(telling stories with the child)。

ここで示されているMiller(1994)による子どもの自己構築を3種類の物語りに分けてとらえる見方は、自己構築と密接に関連する「キャリア・ナラティブ」の構築の問題を考える際にも有力な視点を提供するものと思われる。つまり、子どもの社会化過程における「キャリア・ナラティブ」の構築には、「周囲で語られる(around)」側面と「に関して語られる(about)」側面、「共に語る(with)」側面という3種類の側面があり、それぞれの側面から構築されるナラティブの問題としてとらえることができるのである。

4. 「オルタナティブ・ストーリー」としての「キャリア・ナラティブ」の構築の可能性をめぐる諸問題

以上の検討内容をふまえ、あらためて、以下のとおりの問題設定をおこないたい。

- (1) 現在の日本の学校教育における教育思潮の一つを形成している「勤労観」や「職業観」の育成としての「キャリア教育」について考えた場合、そこにはどのような「ドミナント・ストーリー」が形成されつつあると言えるのか。
- (2) 「オルタナティブ・ストーリー」としての「キャリア・ナラティブ」の構築の可能性があるとすれば、それはどのようなものとして具体的にとらえることができるのか。課題は何か。

4-(1) 「勤労観」や「職業観」の育成としての「キャリア教育」の位置を確認する

『教育委員会月報』（平成18年6月号）には、「キャリア教育に関連する主な報告書・施策等（平成11年以降）」が、文部科学省関係と国・他省関係とに分けて、まとめられている。

文部科学省関係については、平成11年3月の「中学校における進路指導に関する総合的実態調査」に始まり、同年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」、平成13年2月「高校生就職問題に関する検討会議」報告、平成14年3月「高卒者の職業生活の移行に関する研究」報告、同年11月「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター）、平成16年1月「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」報告、平成16年2月「専門学校等における『日本版デュアルシステム』に関する調査研究協力者会議」報告、平成16年4月～「インターンシップ等の充実・改善に向けた調査研究（国立教育政策研究所生徒指導研究センター）、平成17年10月中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」、平成17年11月～「キャリア・スタート・ウィーク・キャンペーン」、平成18年1月「教育改革のための重点行動計画」、同年2月中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「審議経過報告」、同年3月「中学校・高等学校における進路指導に関する総合的実態調査（実施時期平成17年2月）」（日本進路指導協会文部科学省委託）、以上である。

一方、国・他省関係については、平成14年7月「キャリア形成の現状と支援政策の展開」（厚生労働省）、平成15年6月「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2003」「若者自立・挑戦プラン」（文部科学省、厚生労働省、経済産業省及び内閣府）、同年12月「青少年育成施策大綱」（内閣府）、平成16年6月「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2004」「若者自立挑戦プランの更なる強化」、同年12月「少子化対策大綱に基づく重点施策の具体的実施計画について」「若者に自立・挑戦のためのアクションプラン」、平成17年6月「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2005」、同年9月「若者の人間力を高める国民宣言」、同年10月「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン」の強化、平成18年1月「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン（改訂版）」、以上である。

以上の動向をふまえて、現在の「キャリア教育」問題の位置を確認しておきたい。

まず、「キャリア教育」の概念的定義については、『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』（平成16年1月）において、「キャリア」とは「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」であり、「キャリア教育」は「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」であり、「児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てる教育」であるという定義が示されている。

この「勤労観」「職業観」の教育という考え方については、もともと日本の学校教育における特別活動の領域では、たとえば「学級活動（ホームルーム活動）」では「将来の生き方と進路の適切な選択（決定）」に関する事項を具体的内容の一つとして位置付けているし、「学校行事」では、小学校から高等学校まで共通に「勤労生産・奉仕的行事」を具体的内容の一つとしており、「勤労観」「職業観」を育てる教育を担ってきたという背景がある（現行の『小・中・高等学校学習指導要領』より）。

また、業者テストによる偏差値に依存した進路指導がおこなわれていた現状が見直され、進路指導における業者テストの利用を禁止する当時の文部省の措置（文部事務次官通知「高等学

校の入学者選抜について」1993年2月)により、中学校での進路指導は、「学校選択の指導から生き方の指導への転換」(「生徒が、将来の生き方について多様な選択が可能であることを理解し、自己の進路を探索することを援助すること)を、改善の基本的視点の一つとした(『個性を生かす進路指導を目指して(『中学校進路指導資料第2分冊』より)。つまり、「人間としての生き方、在り方」の教育としての進路指導の考え方が示されたという背景もある。

現在の日本の教育実践現場においては、平成14年11月の「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」(国立教育政策研究所生徒指導研究センター)の中で示された「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」における4つの能力(「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意志決定能力)を各学校段階・学年において育成していくという考え方が、「キャリア教育」の実践のための指針として採用され、具体的な教育実践として展開されてきている。

以上のような教育的文脈が形成されてきた一方で、「フリーター」や「ニート」などの職業社会における若者の雇用・就業に関わる状況の特徴的な変化という社会的文脈が生まれることによって、両者の合流した地点として、現代日本における「キャリア教育」問題の位置を確認することができるだろう。

「キャリア教育」の取組の現状について、文部科学省のホームページには、「経済財政運営と構造改革に関する基本方針2005」において、「若者の働く意欲を喚起しつつ、その職業的自立を促進し、ニート・フリーター等の増加傾向を反転させるため、『若者自立・挑戦のためのアクションプラン』(平成16年12月)を強化・推進することとされたことをうけ、「若者が勤労観・職業観を身に付け、明確な目的意識をもって職に就くとともに、仕事を通じて社会に貢献できるよう、中学校を中心とした5日間以上の職場体験(「キャリア・スタート・ウィーク」)の推進を通じ、キャリア教育の充実などに取り組んできたところです。平成18年度においては、各学校段階を通じた体系的なキャリア教育・職業教育を引き続き進めるとともに、新たに、専修学校や公民館等を活用してニート等を対象とした『学び直し』の機会の提供に取り組むこととしております。」と記載されている(『若者自立・挑戦プラン』における文部科学省の取組について)。

現在進行中の「キャリア教育」は、文部科学省から示された「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み(例)」にもとづき、学校教育において「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の4つの「能力」を形成することに基礎をおき、「キャリア・スタート・ウィーク」に代表されるような「職場体験学習」の充実によって展開される教育活動として展開されつつあるものとして把握することができる。

4-(2) 「オルタナティブ・ストーリー」としての「キャリア・ナラティブ」の構築の可能性と課題

1) オルタナティブな視点について

『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書』の中で登場する「キャリア」の定義:「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」という意味での「キャリア」意識の獲得の問題を考えようとするとき、「通過儀礼」の視点に立って考え直すことにも一つの意義がある

のではないかと考える。その理由は、伝統的な日本社会において、子どもや若者の社会的自立を「目に見える」形で担ってきた文化装置としての「通過儀礼」の機能不全という事態は、現代の子ども・若者の社会的自立の困難さを説明すると同時に、職業社会への参入過程としての「通過儀礼」過程の再検討をおこなうことを通じて、「通過儀礼」機能の再構築としての「キャリア教育」の可能性や課題を考えるという視座を示すことができるのではないかと考えるからである。

「通過儀礼」は、ある一つの文化集団の構成員がまた別の文化集団の構成員へと移行する過程にみられる儀礼のことであり、ジェネップ, A. V. (秋山・彌永訳, 1999) によれば、「分離」- 「過渡 (移行)」- 「再統合」という三つの段階からなる。この三つの段階を経ることにより、新しい構成員は、新しい社会的地位を獲得したということを他者によって確認され、また自己によって実感されるという文化装置のことである。ターナー, V. W. (富倉訳, 1996) は、「通過儀礼」の中でも特に中間段階である「境界性 (liminality)」の意味に注目し、「コムニタス(communitas)」という概念によって、自由で平等な人間同士の結びつきが生まれる可能性を論じている。

この「通過儀礼」の問題について、小浜逸郎氏は、『正しい大人化計画 若者が難民化する時代に』(ちくま新書、2004年)の中で取り上げ、「法的な通過儀礼」を2段階(14歳(中学校卒業時)と18歳(高等学校卒業時))で設定することを提言している。あえて「法的措置」をとることの意義について小浜氏は、現代において「社会的な大人」への自覚を深めるために必要なことであると言及し、「教育のみならず、法的なシステムの上からも、あたかも『大人』になることにとってある通過儀礼をくぐることが是非必要であるかのごとく思わせるようなインセンティブを彼らに与えるのでなくてはならない。これはどのみち一種のフィクションにすぎないと言え言える。しかしやはり必要なフィクションだと思う。」(同書, 147頁)と述べている。と同時に「大人化」にとって不可欠な「労働経験」のあり方にふれ、「労働経験を『学校教育』とは別に味わわせる」ことの意義についても言及し、「労働経験を味わわせることの必要を『学校教育』の枠組みの内部で満たそうとすると、科目の設定をし、カリキュラムを作り、指導書や教科書を作り、『教育上』好ましくないと思えるやり方は無意識に排除し、ということになる。報酬を与えることなどもおそらく論外として取り除かれてしまうだろう。このように純粹培養された『教科』としての労働など、本当の労働経験ではない。年少者に味わわせる労働経験は『学校教育』とは切り離れた時間と空間で行われるのではなくてはならない。」(同書, 159頁)と述べている。これらの指摘は、現在進行中の「キャリア教育」の考え方に対する、一つのオルタナティブな視点の提示として興味深い。

2) 「キャリア」意識の獲得の物語の再検討

「学校教育」に限定されない活動において、「自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」としての「キャリア」の意識を獲得することに成功している事例を検討するため、かつて私は、浮谷東次郎という一人の人物を取り上げ、15歳(中学3年生)の時に体験した50ccのオートバイによる市川～大阪間往復1500キロの旅の体験記：『がむしゃら1500キロ』を対象として、以下のとおりの検討をおこなった。

「中学最後の夏休み、高校入試が控えてはいるが、一つ大きな旅行をしてみよう。」と始ま

るこの手記の中から、特に以下の2カ所の記述に注目した。

(二日目の記録から)「そんな立派な道もいつしか幅の狭い、しかも道路工事の道へと変わっていつてしまった。そこで働いている人夫さん達は、そろそろ昼メシを食べ始めていた。そしてそばに小さな女の子が、大きなスイカをたたみの上に置いて売っている姿が見られた。美しい姿だった。なんだかその女の子の清らかさと素直さを見て、ある悲しみを味わわされたー『自分はこうしてあそび回っている、あの女の子が一心にスイカを売っているのに』と自分が情けなくなってきたのである。」(『がむしゃら1500キロ』, 36頁)

(三日目の記録から)「(大阪で映画『南極大陸』を観た後)ホテルに帰ってから涼しい冷房の室の中で頭を冷やされてくるにしたがって、ぼくの精神もだんだんおちついてきた。『彼らの収穫は充分にあったはずだ。コツコツと、正確に収穫をあげていったのだ。ところがぼくはどうか。パ、パッと大阪行きを決めて、ただ行って、金を使って、人さわがせをただけに終わってしまうのか。ぼくに収穫なぞあるうはずもない。消費ばかりで、生産はないのではないだろうか.....作るとしたら何が作れるのだろうか.....』。ぼくは、自分がだんだんと情けなくなってきた。車と暇があればだれでもできるたかがドライブを、しかも親の金でやっているドライブを自慢してきたぼく。一般の50ccバイクより性能がいいクライドラーを乗りまわす事を誇りとしていたぼく.....。ぼくは情けなくなった。ぼくは負けず嫌いだ。『自分には生産する能力がない』と思えばなしになぞしていられるものではない。ぼくは考えた。『この旅行をして何をつくれるかー生産できるか』 - 『ぼくに生産できるものは一つしかない。紀行文を書く事だ。紀行文を終りまで書きあげる事だ。上手だろうが下手だろうが、そんな事は全然問題ではない。ベストをつくして、終りまで書きあげれば、それで立派な生産だ。ぼくにだって生産できるのだ。ようし、やってやるぞ、宗谷にできるだけ近づくのだ。そういつまでも負けてばかりいられるものか』。ぼくの負けず嫌いが頭を出しはじめたら、いくら押しでも引っ込むものではない。ぼくはすぐ紀行文を書き始めた。」(同上書, 56-57頁)

この2つのエピソードースイカ売りの少女のエピソードと、映画「南極大陸」観賞後のエピソードをここで引用したのは、次の二つの理由によるものである。

まず第一に、それらのエピソードは、自らの冒険旅行そのものの意味を問い直し、消費する者でしかなかった自分に疑問を持ち(「分離」)、視点を変えることにより(「過渡」)、生産する者としての自分の生き方へと意識を変容させる(「再統合」)、という意味で、この冒険旅行が「通過儀礼」としての特徴をもつことを示すエピソードとなっているのではないかと考えたからである。

第二に、「キャリア教育」が問題にする「勤労観・職業観」の問題として考えてみたときに、それら2つのエピソードは、「自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」という意味でのキャリア意識の獲得の好例となっているのではないかと考えたからである。そのことは、8日間の旅を終え、後に体験を振り返った時に、「みんなよりも良い立場にある自分は、その分だけ社会にそれを返さなければならない。消費の生活は、人間の生活ではない。生産の生活こそ、この世の最大価値だ。一生懸命働く事こそ、人間としての最大の価値だ。ぼくは、それをしみじみ感じた。」(同上書, 117頁)と述懐している部分の記述からも明らかである。

「キャリア教育」の意義が、「自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積」という意味でのキャリア意識の獲得にあるとすれば、浮谷東次郎が15歳の時体験した冒険旅行は、まさしく彼にとっての「キャリア教育」であったといえることができるだろう。それは、「通過儀礼」

の特徴をもった冒険旅行であったがゆえに、より効果的に達成されたともいえる。したがって、浮谷の手記を手掛かりとすることによって、「通過儀礼」機能をもつ体験を通じた「キャリア教育」の可能性を見出すことができるのではなからうか。(瀬戸, 2005b)

この検討箇所に関して、ここでは「コンストラクティビスト (ナラティブ)・アプローチ」の立場に立つ研究者の視点を参照することにより再検討してみたい。

Cochran(1990)は、「キャリア研究のためのパラダイムとしてのナラティブ」を検討する論文において、ナラティブ・リサーチには2種類あると述べている (p.78)。一方は、人生への忠実さに基礎づけられるストーリーを発展させることに関するもの (ナラティブの構築) であり、もう一方は、ストーリーの中に具体化された意味やプロットや説明をひきだすことに関するもの (ナラティブの批評) である。前者の立場に立てば、「受動者(patient)」ではなく「動作主 (agent)」のプロットによって、自分自身の人生を生きるという感覚 (sense of agency) を促進することが重要な課題となる。一方で、後者の立場に立つと、「パーティシパント (参与者)」のもつ4つの限界 (自分以外のパースペクティブの理解を欠く、ある人の意図のレベルにとどまる、時間的展望が短い、結末を見通せない。) に対して、ストーリーを正す者としての“bard(吟遊詩人)のビジョン”あるいは「スペクテイター (見る人)」の役割 (spectatorship) の重要性を指摘することができる (pp.74-76)。さらにCochran(1997)は、この2つの方向性がサイクルをなすように進められていくものとしての「キャリア・カウンセリング」の可能性について議論している。

この sense of agency や spectatorship 「ナラティブの構築」や「ナラティブの批評」等のキーワードに注目することによって、もう一度、浮谷の記述した内容を再検討してみることしよう。

この体験の記録は、まずは、50 ccのバイクによる単独旅行を sense of agency をもって遂行するという、パーティシパントとしての「ナラティブの構築」の記録として読むことができる。と同時に、ここで引用した2つのエピソードにみられるように、道中での偶然の出来事との遭遇という事態に対して、最初のエピソードであれば「スイカ売りの少女」を、次のエピソードであれば映画『南極大陸』や (南極観測船の)「宗谷」を鏡として、自らの行為を省察する 'spectatorship' の視点を明確にもった「ナラティブの批評」の記録としても読むことができると言える。特に後者の側面について、私はそれを「通過儀礼」的な意識の変容として解釈することができる。最初は単純に考えたが、今さらに付け足すことができることは、その意識の変容は、「パーティシパント」というポジションから「スペクテイター」というポジションへの移行さらに2つのポジション間の往還関係がそれを可能にするという点である。

また、映画『南極大陸』の鑑賞内容と自らの体験とを照らしあわせながら自己省察を深めるという出来事に関する記述においては、折り返し地点という場の「リミナリティ (境界性)」も影響しているということをつけ加えて考えておかななくてはならないだろう。出発地でもなく、目的地でもない中間地点であるがゆえに、単なる「パーティシパント」ではなく、また単なる「スペクテイター」でもないという「リミナル」なポジションを取りやすくなるのであり、それは「通過儀礼」的な意識の変容にとっても重要なポジションの取り方を可能にするということを確認することができるのではなからうか。たとえば、この体験記の中に、「(第五日)『これからどういうコースで市川に帰ろうか。しかし東海道をそのままひっかえすのが、なにはな

んといえ、一番無難な事はまちがいはない。だがそっくりそのまま、きた道をひっかえすのは残念だ。ほんとうは、日本海側を通して、新潟あたりから軽井沢にぬけ、そこから帰ってくれば理想的なのだがな。そうもいくまい。そうすると、和歌山にでて、紀伊半島一周をやるか、とにかく和歌山まで、行ってみなくては。そういう風に考えがまとまった。」(前掲書, 67-68頁)として、現地であらたな目的地を見出し、そこでも予期せぬ出来事に遭遇しつつそれをなんとか切り抜けるという体験が記述されている。こうした体験の「プリコラージュ(器用仕事)」の生成もまた、折り返し地点という場の「リミナリティ」が促進する体験であったともいえるのではなからうか。

3) 「キャリア」問題をめぐる物語の課題

映画『ある子供(L'Enfant)』(監督・脚本:ジャン＝ピエール&リュック・ダルデンヌ、2005年日本公開)は、現代社会における若者と「キャリア」の関係に関する問題を提起するという意味で興味深い作品の一つであると言えるだろう。この映画では、若者の失業問題が深刻化するベルギーのある都市において、定職もなく盗みなどでその日暮らしをする男女の間に生まれた子供を父親にあたる若者が金で売ってしまおうとする出来事を中心として、二人の男女の関係の物語が展開する。

この映画をめぐる感想や批評としては、たとえば宮本みち子氏による感想:「『ある子供』は、自立できる条件を奪われ、誰の助けも配慮もないなかで生きていかねばならない若い男女をリアルに描いている。彼・彼女に希望をもてと言えるだろうか。それでもダルデンヌ兄弟監督は、ふたりのなかにひとすじの希望の光をみようとしている。でも、それには誰かの理解と助けがいるというのが、現実主義者の私の感想だ。」(宮本, 2005)のように、「若者の生活基盤の脆弱化」を指摘するとともに「日本と無縁の話ではない」とする感想が多くみられる。

その中で、国谷裕子氏は、「ダルデンヌ兄弟の新作<ある子供>の主人公の若者は、一人ぼっちになり一人だけの時間を持つことをきっかけに子供から大人への移行の手掛かりをつかんだかに見える。孤立化の中、一人でいることに耐え、そこで力を蓄え、反転するチャンスを獲得すること。格差社会が進行し、ますます生き難い時代になる中、自分の内側の声に耳を傾け、『ひとりの時間』を豊かなものにすることがいま必要とされている。」(国谷, 2005)と述べ、現代の若者と「キャリア」の関係の問題に対する一つの見方を提示している。

この指摘を考えると、ダルデンヌ兄弟の他の作品と同様に、ナレーションをつけず、音楽も排して、ひたすら若者たちの姿だけを追うというドキュメンタリー的な技法は、主人公の「孤立化」感や「ひとりの時間」のもつ意味というものを映画を観る側に考えさせるという点で効果的に働いたと考えられる。これは、たとえば若者と「キャリア」の問題をテレビ放送等のマス・メディアが取り上げるとき、多くの場合、その映像にはナレーションがつき、それぞれの物語の進行を、安定した立場にあるナレーションの語りに誘導されつつ、ある一定の解決へと導かれていくのとは対照的である。この技法にも支えられて、われわれ映画を観る側は、『ある子供』における「実存」的な行為の意味を共に考えさせられる。

つまり、映画『ある子供』のような、「と共に語ること(telling stories with)」を基調とするオルタナティブ・ストーリーの提示は、現代社会における「キャリア」問題をめぐるナラティブ環境の特徴が、大人の側が支配的ナレーターとして「に関して語ること(telling stories about)」をドミナント・ストーリーとするものであること、そして大人の側のナレーショ

ンによる作中人物（キャラクター）としての若者のポジションというものをあらためて確認させてくれるのである。

また、この映画のプロットにも、「通過儀礼」の構造を見出すことができる。ある若者が、それまでの自分にとっては当たり前前の生活の延長線上における行為として行った「子供売買」という出来事をめぐって、他者（母親としてのアイデンティティを示す者）の強い抵抗に遭遇し、自己の物語の変更を余儀なくされるというこの映画のプロットには、それまでの自明な世界からの‘離脱’、そして試行錯誤の‘過渡’期を経て、やがて他者とのつながりを自ら求める人間という新たなポジションへと‘再統合’されていくという「通過儀礼」の構造が示されている。地に足をつけて他者との関係を再構築する契機を獲得するにいたるこの「通過儀礼」の物語には、「キャリア」に関するさまざまな問題がしみ込んだ（problem-saturated）若者たちのドミナント・ストーリーに対する一つのオルタナティブ・ストーリーの展開の例をみて取ることができるのではなからうか。

さらに「キャリア・ナラティブ」の構築におけるオルタナティブ・ストーリーの可能性と課題という問題を考えていくにあたって、ここで再び、浮谷東次郎の記録を参照したい。

彼は、15歳の夏に、自らのバイクによる1500キロもの冒険旅行を企てたが、その後、18歳のとき、単身アメリカ合衆国へ渡り、21歳までの2年半の間滞在している。その2年半の間の記録（手紙）の記述内容から、次の2つの箇所を引用しておきたい。そこには、「キャリア・ナラティブ」に関する諸問題を考える上でいくつかのヒントが示されているように思われる。

「カリフォルニアで、フォードのボロにまどわされながらもクリスタル湖に仕事を得て、マウント・サン・アントニオにはいたあの頃、まったくカリフォルニアにきてよかった。こんなに素晴らしく青春を楽しめるじゃないか。ニューヨークの自分にはコケがはえていた。何も知りやしなかった。タイムをくびになるのがこわくてオロオロしていたし、いいたいこともこわくていえなかった。なあに、僕はこれから　僕はニューヨークの時自分の生活を完全にまかなっていたけれど、それはmatureという点において意味をもちません。」（『俺様の宝石さ』、239-240頁）

「二年半ほどアメリカにいることになりました。ずいぶんいろんな経験をしました。けど、はっきりいって、「もっとずっと経験したかったし、さらにもっともっと多くのことをしてみたい」って気持ちです。後悔というものは自分がしたことにするのではなく、しなかったということに対してするものらしいですね。つくづく感じます。特にニューヨーク市でタイム・ライフで働いていた頃、考えてみるに、もっと多くのことができたはずでした。だから日本に帰ったら、うんとかっとなってやる気です。Because I only live once.（なぜなら僕は一度しか生きないのだから）チャンスというか、運というか、幸福というか、lifeというか、とにかく自分でつかむものであって、むこうからやってくるものじゃないです。」（同上書、265頁）

この18-21歳までのアメリカ滞在中の記録と15歳時の1500キロのバイク旅行中の記録には、新たな場所に立ち、それまでの自らの生活を振り返り自省的にとらえ直すという共通性がある一方で、いくつかの違いを見出すことができる。それは、たとえば、‘mature’へのこだわりである。引用した部分以外にも‘To stand on my own feet.’とも言い換えられ、ここかしこに登場する観念である。また、‘life’を「自分でつかむ」とする認識の表明がなされるが、これも15歳時の8日間の旅行では得られなかった認識である。これらは「自立」への志向とそのあがきとも言えるだろうし、「社会化」過程にある者の「内側からの」報告ともとれる内容

であると言えるのではないか。

また、ここに記された叙述内容を読んでいくと、そこに、映画『ある子供』に登場する若者たちが最後にたどり着いた地点と共通するある特徴が示されているように私には思われる。それは、物事の「リミナリティ」や「中間過程」を経験することによって、「動作主」の感覚を獲得するという意味での「探求」のプロットをもったナラティブの構築としての共通性である。Gibson(2004)によれば、「探求(quest)」のプロットとは、「行為と洞察や人格変容を結びつけ、行為を通じてキャラクターを形成する」ものであり、「既にあるものの覆いをとるという意味での精神力学が示唆する興味関心としての探知(detection)」とは区別される(p.179.)。「探求」のプロットによる「キャリア・ナラティブ」の構築の促進としての「キャリア教育」の考え方に立つことの意味をこれらの事象の検討を通じて酌み取ることができるのではないか。

<引用・参考文献>

- Bujold, C. (2004), "Constructing career through narrative," *Journal of Vocational Behavior*, Vol. 64, Issue 3.
- Cochran, L. (1990), "Narrative as a Paradigm for Career Research,"
In *Methodological Approaches to the Study of Career* (eds. R.A. Young & W.A. Borgen)
- Cochran, L. (1997), *Career Counseling: A Narrative Approach*, SAGE.
- ジェネップ, A. V. (秋山・彌永訳, 1999) 『通過儀礼』 (新思索社)
- Gibson, P. (2004), "Where to from here? A narrative approach to career counseling", *Career Development International*, Vol. 9., No. 2.
- 小浜逸郎(2004) 『正しい大人化計画 若者が難民化する時代に』 (ちくま新書)
- 国谷裕子(2005) 『「格差」 『サスティナブル』 『ひとりの時間』 『文藝春秋』 2006年1月号
- Miller, P. J. (1994), "Narrative practices: Their role in socialization and self-construction", *EMORY SYMPOSIA IN COGNITION* vol. 6.
- 宮本みち子(2005) 『日本と無縁の話ではない』 『ガーデンシネマ・イクスプレス第124号』 『ある子供』 劇場用パンフレット
- 文部科学省初等中等教育局初等中等教育企画課(2005) 『教育委員会月報』 (平成18年6月号)
- 日本進路指導協会(2004) 『学校から社会へ』
- Patton, W. (2005), "A Postmodern approach to career education, *Perspectives in Education*, Vol. 23(2).
- 瀬戸知也(2005a) 『社会性 教育問題の社会学の観点から』 『児童生徒の社会性を育てる特別活動のカリキュラム開発に関する総合的研究 (研究代表者安井一郎)』 (「平成14~16年度科学研究費補助金報告書」)
- 瀬戸知也(2005b) 『児童生徒の社会的自立にとっての『キャリア教育』の可能性と課題』 (日本特別活動学会第14回大会課題研究3.報告資料)
- 高橋均(1986) 『社会化』 『新教育社会学辞典』 (東洋館出版社)
- ターナー, V. W. (富倉訳, 1996) 『儀礼の過程』 (新思索社)
- 浮谷東次郎 (1972) 『俺様の宝石さ』 (筑摩書房)
- 浮谷東次郎 (1981) 『がむしゃら1500キロ』 (新潮文庫)

(付記) 本稿は、日本教育社会学会第58回大会 (2006年9月22日, 於: 大阪教育大学) において口頭報告された原稿に加筆修正を施したものである。

(2006年9月26日 受理)